

ドクター内田の ジャズは乾杯

〜28〜
29

ジャズを聴きはじめて三十五年を超してしまっただけで、一度だって飽いたり、いやになつたりしたことがない。

少しむずかしく考えたり、これはジャズが、時代を反映し、社会の動きとともに変

うし成長する生きた音楽。だからなんだろうね。でも、それにもまして、ミュージシャンたちが、あまりにも魅力的だつたからというのが、僕の本音かもしれない。

それにしても、ジャズをめぐっての人々との出会いで、僕は本当に恵まれていた。

一方では、少しばかり大げさかもしれないし、自分で言うのもおかしいが、ジャズの修羅場になせ

居合わせた守安さんは、ふだんはまあ、なんて格好つけたくな

るくらい、運命の糸にあやつられたよう

な、体験の積み重ねだつたと、いつかするのだ。この連載を終えるにあたって、そんな思い出をもう二、三お話しさせてほしい。

あれは神田のリズム社に行

くようになったころ、東京での行動の足場にしていたのが、有楽町にあったジャズ喫茶「コロンボ」で、そこは久野ちゃんがあこがれて名を借りたほど、本物のジャズメンが集まっていた。

すさまじいで、今も姿が目につく。

若くして鉄道自殺してしまつたが、その守安さんのグループにいたのが、二十五年前の宮沢昭だつた。

こちらは外国でのお話だが、一九六四年初めてニューヨークに降り立ったその夜、真つ先に訪れたのがモダンジャズのメッカ「ボードラン」で、そこでヨーロッパから帰国したばかりのバップピエ

たえず前進の

ジャズに乾杯

ノの祖、B・パウエルを聴いた。死の直前だつた。

深夜、その足で向かったのがクラブ「ハーフノート」。

そこに出でいたのが、六二年代以降のジャズメンに深い影響を与えたJ・コロトリン

響を写したJ・コロトリン

ターノのグループで、本当に信じられぬほどの運の良さだつた。

これは六八年、この時はルマン二十四時間レース観戦を目的に一人ヨーロッパに向かつたが、フランスじゅうが学生運動に荒れ狂つていて突然レースは中止。

その途上の機内の新聞で偶然知つたのが、また二回目のモントルージャズフェスティバルで、急拠、ジュネーブで降り、車を飛ばして聴いたのがB・エバンス・トリオだつた。

その夜の録音が、彼の傑作「モントルーのビル・エバンス」という具合で、不思議なめぐり合わせとしか言いようもない。

だが過去は過去。ジャズはたえず前進を続けている。今の僕は、古い友との触れ合いを大切に、新しい人との邂逅(かいこう)を願いつつ、生ある限りジャズと手をたずさへ歩きたいと考えている。どうか一緒に、愛するジャズに乾杯、しようではありませんか!! (内田 修)

一番後ろの「指定席」で「ヤマハジャズクラブ」のコンサートに耳を傾けるドクター内田一名古屋・ヤマハビルで



つられたよう

命の糸にあや

ラフに出るのが

せんか!! (内田 修)